莫斯科の夜

大竹　清子

■本文は「婦女新聞」大正一三（一九二四）年三月九日号に掲載された。同紙記者「豊子」による前書きをも含め、以下に掲げる。大竹清子の文章の方は「豊子」への返信の形で書かれた。タイトルの「莫斯科」はモスクワと読む。文中では「モスコウ」と表記。以下、〔　〕内は村野の付記。

【震災（一九二三年九月一日の関東大震災）で慈母を喪はれた大竹夫人の悲しい書信】

外電は頻りに日露の国交の穏かならぬ報を傳へます。私共は震災の悪夢からまだ覚めませぬ。怖しさを追憶しては復興に力を注がうとして居る際です。どうぞ円満な解決をと祈らぬ国民は只の一人もありますまい。

モスコウに只一人の日本婦人として滞在した東方通信社モスコウ派遣員大竹氏の夫妻も立退を迫られて、ポーランドに駐在さるゝとか外電は報じて居ましたが、その大竹さんの夫人清子さんは、曾て吉田清子さんと云つて国民新聞社に永らく婦人記者として就職し才筆をふるつて居られました。清子さんは日本女子大学家政科の出身で、三四年前大竹さんと結婚し、〔夫の大竹博吉は〕久しく浦潮〔ウラジオストク〕に在勤されたのでしたが、昨春アントノフ氏との交換通信員としてモスコウに派遣されたのです。

無論その後は私信の往復も杜絶して居たのでしたが、左の一書は一月の初旬モスコウを通過して独逸から帰朝された日本人の一行に托されて送られたのです。少しく時日は経過して居りますが、この折柄モスコウからの通信は再び繰り抜いて見たいやうにも感じましたし、又一つには、清子さんは彼の震災に一人の母上〔のちに清子の弟の死も判明〕を失はれました。その悲報に驚きながら書かれた此書の中には、震災後日譚として読者の御同情を促したいものがあります。何うぞ御一読下すつて清子さんの無事を祈つて上げて下さいませ（豊子）

日本の地震があんなに迄ひどいとは私共はよほど経つてから知つたのです。現場にゐらした方はどんなだつたでせう。モスコ

ウからあはてゝ帰つていつた人から手紙が来ました。何等の損害すらなかつたさうです。それはあなたのぢき近くの人なのであなたのお住居も或は御異状はなからうかと思ひます。

それにしてもあなたは御変りないでせうか。御社が焼けて大へんでしたでせう。

私はとう〳〵何物にも代え難い母を失いました。こんな外国に居て誰一人語る人もない私は、今しみ〴〵とあなたに訴へたい為にこの手紙を書きました。

十月の七日に私は初めて母の行方不明を本社からの電報で知りました。それまでは私は、まさか母が東京の叔父の家に居やうとは思ひませんでした。弟が学校を卒つて大宮に勤めるころになつたので、其方に居る筈と安心し切つて居たのです。

全く運命といふものは、間一髪の怖るべき危さを以て近づいて来るものです。一番怖ろしい被服廠跡だと思ひます、骨もないのでほんとうのことは分りませぬ。大竹の親類まで加へて六軒焼失しましたが死んだのは私の母だけです。本所の家の、あの幼さい幾人かの子供までが助かつたのに、五十三歳の達者な母が助からなかつたのは恨めしいことです。〔被服廠跡地の〕三万数千の犠牲者として母は死にました〔関東大震災の死者・行方不明者は推定一〇万五千人〕。その多くの遺族の人達は、私のやうに泣いて居るでせう。私はその人達と一所に手を取合つて泣きたい。想へば思ふほど悲しさやるせなさがこみ上げて来ます。帰つて見た處で仕方がないから、私はモスコウで一人泣いて居ます。何といふ悲しいことでせう。語るべき言葉を持ちませぬ。日本は私に取つて淋しい處になりました。母親といふものが、是れ程迄に私に取つて大きな引力と愛とを持つて居たことは、今更深く感じました。

男といふものは 涙ぽい女の愚 痴を聞くことをいやがります。矢張り母は私の第一のものでした。豊子様、これは私の本当の心持ちなのです。手がなくても足がなくても、母に生きて居て欲しい。此希望はモウ無駄なくりごとです。日本人の居ない寂しいモスコウはひとり泣くには相応しい處です。

十一月の末からモスコウは雪の都になりました。モスコウ川の大公望〔釣り人〕も影をひそめ、公園のロハ台の男女の抱擁も寒さの為めに退却しまひましたが、夜が長くなり芝居のシーズンが開かれると同時に、夜の巷は段々に展開されてゆきます。辻姫跋扈と乞食の数とは、寒さと共に比例して行くとさへ思はれます。

独逸から当地を通過する人の日本人客と三人で芝居の帰りに、人影のまれな街を歩いて居る時でした。売春婦の群のみ三々五々散つて居ましたが、一人の女が近づいて来ると同時に「煙草はありませんか」と語をかけ、腕をのばして私の夫を擁してゆきかけました。彼が辛うじて引返して来ると、今度はも一人の客を引張つて半丁程〔五〇メートル程〕も連れて往つて仕舞ひました、私は二人の男に腕を貸してズン〳〵連れて逃げました。之は夜の一時、性欲広場での出来事でした。

性欲広場とは好くも言つたもので此地は帝政の昔から淫売の市だそうです。そこには文豪プシキン〔プーシキン〕の銅像が此光景を寂しげに黙視して居ます。一方には修道院—今は開放されて居ますが—の建物が立つて居るのです。

現在モスコウでの責任者の日本人は私共夫婦だけです。今日で二度目の団体が、独逸から通過します。其度に私共は、どんな人が来るだらうと楽みながら迎へます。彼等は次の列車を待つて出発して仕舞ひます。あとは又静寂に戻りましたが、モスコウへ来る人は知るも知らぬも必ず電報をよこして、私共へ宿のことなどを頼むのが常となりました。今通過する土方伯〔土方与志、本名久敬、一八九八〜一九五九年〕、理医博代議士松下禎二氏〔一八七五〜一九三二年〕などが居られます。私は今その団体に頼まうとこの手紙を書いたのです（後略）。〔（後略）は原文通り〕

———

■昨二〇二三年七月に宮本立江氏と共に『大竹博吉、大竹せい著作・翻訳目録』を上梓したが、本篇はその後で発見した大竹せい（清子）の文章の一つである（筆名で用いた旧姓が二つある。一つは吉田＝養父の姓、もう一つは清水＝実父の姓である）。国会図書館で不二出版の復刻版『婦女新聞』から複写することができた。

大竹せい（一八九一〜一九七一年）はこのモスクワ滞在期のあと、一九三〇年代以降、東京で、夫の大竹博吉（一八九〇〜一九五八年）と共に、第一次、第二次、第三次のナウカ社の事業に携わった。すなわち、ソ連からのロシア語書籍・新聞雑誌の輸入・販売と、ロシア語からの翻訳書籍を含む多彩な刊行物の出版とである。

（二〇二四年三月三一日、村野克明、記）